

# 視点

## この春、新たな船 出をする君たちへ

レノゴー会長兼社長

大坪 清



学生時代はバレーボールに明け暮れていた。その中で唯一自慢できるといえば、経済学の父と

呼ばれるアダム・スミスの「国富論」を原書で読んだことぐらいだ。

勉強しない私を見かねたゼミの担当教授が勧めてくれたものだが、これが読み始めてみると面白い。

分業論(Division of Labor)に始まり、見えざる手

(Invisible Hand)が出てくる国富論は、経済学とい

うよりも、むしろ倫理や哲学、経済における人間の感情の働きの重要性を説いている。これが今でも、私

の経営哲学の根幹となっている。

卒業後は商社に就職した。当然、華やかな海外での活躍を夢見て入

社したのだが、言い渡された辞令

は出資先の製紙会社へのいきなりの出向だった。尼崎にある製紙工

場の、今思えば3Kそのものの現場で、創業社長から3年間製紙の

イロハと工場経営をみっちり仕込まれた。お陰で、「真理は現場に

ある」ということを、身をもって学ぶことができた。その後、海外勤務

も経験したが、長年にわたり担当した紙パルプ業界との縁は切れず、

結果として当社の社長になった。仏教における因縁とは不思議なものだが、若かりし頃、まさに体に染

み込むようにに刻まれた知識や体験(原因)が、今でも縁になって大

いに役立っている。

新社会人をはじめ、この春、希望

を胸に新たな船出をされた人も多く思う。人の一生は出会いの連続であり、縁の積み重ねである。思いもよらない人や書物、出来事との出会いが人生を豊かにしてくれる。時として理想とする方向や、希望とは多少違うこともあるかもしれない。しかし、その時々を一生懸命生きることが大切だ。

私の好きなサミュエル・ウルマンの詩、「Youth is not a time of life, it is a state of mind. Not only by living a number of years, we grow old by desire, our idea

ls.」、青春とは心のありようであり、単に年齢を重ねることで失われるのではなく、理想を捨てた時に失われるとある。

一方で、Time and I  
de wait for no man

n.」という言葉もある。時間と潮の流れは、人間の動きを一切待たない。その意味するところは、月日のたつのは非常に早く、どんどん過ぎ去ってしまうということだ。

未来は自分の意思で変えられる。未来とは希望と誇りと言い換えてもよい。希望とは、与えられるものではなく、いろいろなことを学びつつ、成長し変わっていく新たな自分を発見することだ。そのためには、理想を胸にいつまでも若々しい感性を持ち、何事からも学びとろうという姿勢が大事だ。

誇りとは、自らの人生に期待し、矜持を持って自ら信ずる道を往きその質を高めていくことだ。悩むことや戸惑うこともあるだろうが、時間を大切にし、立ち止まることなく、常に青春の心を持ちながら、仕事に、勉学に、あるいは自らの生活に励んでいただきたいと思う。

仕事は厳しく、人生は愉快に。この春、新たな船出をする諸君にエールを送りたい。

K